特集　プロジェクトＢⅡ「言語と文化」

はじめに

── ２つの言語学 ──

本号は本学のプロジェクトＢⅡ「言語と文化」の研究成果の一部として書かれた論文の特集号を兼ねている。

「言語」と「文化」という組み合わせはよく聞かれる。この紀要のタイトルの「言語文化研究」と同じか似たような名前の紀要は他大学にもある。「言語文化部」，「言語文化研究所」なるものもある。このことは言語が文化と関係づけられることがいかに多いかを物語っている。

言語が文化と関係づけられるとき，文化がそうであるように，言語も人間の所産として捉えられているように思われる。「言語と文学」，「言語と哲学」，「言語学と文化人類学」といった組み合わせが奇異に聞こえないのも，文学や哲学，文化人類学が人文科学であるのと同様，言語学もそうであるというふうに捉えられるからであろう。ところが周知の如く，チョムスキーのように言語学を自然科学に位置づけて研究する立場もある。この立場では，言語を人間の所産ではなく，自然界の一部として捉える。そして実際，自然界を記述する物理学が理論物理学でありうるのと同様，自然言語を記述する言語学も理論言語学たりうるのである。

言語学が人文科学か自然科学かということは問題ではない。どちらの言語学もあるのである。しかし「言語学」という同じ名前を持っているとはいえ，一方は文学と同じ系列，他方は物理学と同じ系列である。目的や方法論が全く違ってもおかしくはない。問題は，言語を人文科学的に捉える立場の人々と，自然科学的に捉える立場の人々とが，その立場の違いに気づかず，同じ言語学の土俵に互いにいるものと勘違いしてしまうことにある。始めからかみ合う余地のない「議論」もそこから生まれる。卑近な例で言えば，実例はいくつあるのか，いやみんな自分が作った例ばかりです，といったやりとりである。言うまでもなく，実例を求めるのは人文科学的発想であり，作例で検証するのは，実験による検証同様，自然科学的発想である。議論するな，ということではない。むしろ立場の違う者同士がお互いに教えられることは多いはずである。しかしその立場の違い，目的や方法論の違いを認識しないで，作例によ

る論証はでっちあげだと一方が言ったり，実例ばかり集める昆虫採集は労力の無駄，などと他方が言い返したりするのは，それこそ時間の無駄である。

念のために言うと，２つの言語学は矛盾し合うものではない。そもそも違う学問なのだから，矛盾するかどうかなどという問題はあり得ない。文学は物理学と矛盾するか，というのが意味をなさないのと同じである。しかし文学と物理学が同じ学問であると言う人は誰もいないのに，２つの言語学の本質的な違いは，どちらも「言語学」という上位概念に収められてきたということも手伝ってか，当事者でさえなかなか意識されない。

ではどうしたらいいか。一番確実なのは，相手側の論文を読むことである。どちらの言語学も言語に関わっているという点では同じなのだから，自分の興味と関連することを相手側の言語学の中に見つけることは容易である。もっとも，普段慣れ親しんでいる論文とは性質が違うのだから，読むとなると決して楽ではないことも確かである。しかしいい論文であれば，基本的なやり方，考え方についてはかなり具体的に分かるものと思われる。自分とどう違うのか具体的に分かれば，取り入れる価値のあるものかどうかも正しく判断できる。全く取り入れる価値なしという判断も，読む前にただ印象的に，あるいは自分の好みだけでしていた判断よりはかなり正確なものになっているはずである。その上での相手側への批判は，相手も聞く耳を持つことになろう。

そもそも似たような問題を全く別の視点で扱っている論文を読むのは，直接取り入れられるものがあろうがなかろうが，それだけで新鮮なものがあり，柔軟な思考へと導いてくれる。そう考えれば，いい論文を紹介してくれる友人を相手側に持つことも貴重であるし，お互いの違いを知ることから，お互いを認め合うということにもつながるのではないか。

本特集号がこの相互理解の一助になれば幸いである。

プロジェクトＢⅡ代表者　佐　野　真　樹